

図書名：「おおかみこどもの雨と雪」 著者：細田守 出版社：角川書店

三次市立君田中学校2年 梶原 真実

(令和2年4月19日掲載)

母親の「花」はおおかみ男と恋に落ち、娘の「雪」と1歳違いの弟「雨」を産みます。しかし雨が産まれた直後におおかみ男を亡くし、一人で子供たちを育てていきます。きっとたくさん悩んだだろうし、疲れて逃げたい時もあったはずなのに、どうして強くいられるのか、考えてみました。

おそらく花はおおかみ男を亡くした悲しみを勇気に変えたのだと思います。大切な人を亡くすと、胸が痛く、泣いても泣いてもものに何か詰まったような感じがとてもつらいです。私が祖父を亡くした時はそうでした。悲しみからなかなか抜け出すことはできませんが、花は子供のたちの命を守るために強くなれたのだと感じました。

また雪と雨からも学んだことがあります。二人は、おおかみと人間の間にも生まれた半分人間、半分おおかみなので、どちらで生きていくか、とても悩みます。

雪は人間、雨はおおかみとして生きていくことを決めますが、二人は意見が合わず、お互いを傷つけてしまいました。考え方が違うことで衝突してしまうことは、人間関係でもよくありますが、最後まで自分の考えを貫いた雪と雨はすごいと思いました。

この本が好きな理由は、二人の子供を育ててきた花の姿を通して、強さや決断、ぶつかり合い、人との関わりの難しさを学ぶことが多いからです。そして雨と雪のように考えが違う人がいても、花のように広く強い心を持ち、周りの人のことをきちんと考えて接していきたいと思わせてくれました。